

顕彰状

小沢昭一氏は、1929年に東京府に生まれる。四歳のときに移り住んだ蒲田での体験が、小沢氏の活動の原点となった。松竹映画の撮影所がある町、蒲田には名曲喫茶、カフェ街がある一方で、寄席もあり夜店も出た。モダンな香りと明治大正の匂いを残す町、蒲田という町が小沢昭一氏を育んだ。

小沢昭一氏は、麻布中学在学中に寄席演芸研究家正岡容氏に師事する。終戦後には大西信行氏、加藤武氏らと麻布中学に演劇部を立ち上げた。早稲田大学第一高等学院、早稲田大学第一文学部文学科仏文学専修と進級、芸能文化研究会（落語研究会）を組織する。1949年、早稲田大学在学中に俳優座養成所の2期生となり、演出家千田是也氏に師事する。1953年に「劇団新人会」を結成、1960年には演出家早野寿郎氏と「劇団俳優小劇場」を旗揚げ、1966年「新劇寄席『とら』」の演技によって芸術祭奨励賞を受賞した。小沢氏は、1974年に「芸能座」、1982年に「しゃぼん玉座」を旗揚げする。たった一人の劇団「しゃぼん玉座」で一人芝居「唐来参和」（井上ひさし作）を持って全国を巡演、「現代の語り部」として、2001年度の紀伊国屋演劇賞個人賞、読売演劇大賞優秀男優賞が与えられている。

1954年には、映画デビューを果たす。日活映画を中心に個性派のバイプレイヤーとして200本以上の作品に出演した。川島雄三監督作品『幕末太陽伝』（1957年）で注目され、今村昌平監督作品『にあんちゃん』（1959年）でブルーリボン助演男優賞、同監督作品『人類学入門』（1966年）では毎日映画コンクール主演男優賞ほか多数の賞を受けた。

戦前、戦中、戦後を駆けぬけてきた小沢昭一氏に、転機が訪れたのは不惑を超えてからであった。俳優としての原点を探し求めて、小沢氏は早稲田大学教授郡司正勝氏の門を叩いた。大学院の郡司研究室に通った五年間を、小沢氏は「郡司病院」「こころの病院」に通った時間だと語っている。はじめての著書『私は河原乞食・考』（1969年）を出版したのち、小沢氏は俳優稼業の原点を求めて万歳、絵解き、ごぜ、浪花節の源流、香具師の口上など漂白の芸人を追って歩いた。そのルポルタージュ『日本の放浪芸』は1972年度の日本レコード大賞企画賞を受賞、続編『又・日本の放浪芸』は1974年度の芸術選奨文部大臣新人賞を受賞する。この体験は、のちに放送大学の講義となり、その記録『ものがたり 芸能と社会』（1999年）は新潮学芸賞を受賞した。なお、1973年には、TBSラジオで『小沢昭一の小沢昭一的こころ』の放送が始まり、30年を超えて今日まで続いている。

小沢昭一氏は、1994年に紫綬褒章、1999年に坪内逍遙大賞、2001年に勲四等旭日小綬章、徳川夢声市民賞、2003年に東京都功労者に認定された。

ここに、早稲田大学は、小沢昭一氏の顕著な功績を称え、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2004年3月25日

早稲田大学